宮崎観光の社会学（3）宮崎から沖縄へ

――新婚旅行ブームと南国イメージの系譜――

一橋大学　　多田　治

1　目的

これまで私は、沖縄を主な対象として、1960 年代以降の観光の歴史と、「青い海」「亜熱帯」「独特の文化」などの沖縄イメージの形成について研究してきた。だが近年、沖縄を同時期の他の南国リゾート地、伊豆・南紀や南九州の宮崎・鹿児島・奄美、ハワイ、グアムなどと関係づけながら理解することの重要性を認識した。本報告ではその中でも宮崎～沖縄の流れに焦点を定め、1960～70 年代に南九州で高まった新婚旅行ブームと南国イメージの流れを日本復帰後の沖縄が引き継ぎ、日本の「南の亜熱帯パラダイス」に位置づけられたプロセスを検証する。この作業は、沖縄研究を一地域研究への自足から脱して、グローバルな関係性や広がりのなかで展開していく試みの一環である。

2　方法

収集資料と聞きとり調査の知見をもとに、宮崎・沖縄の観光と南国・亜熱帯イメージ形成の歴史を検証する。宮崎と沖縄のつながりにおいて、岩切章太郎による宮崎の観光開発、特にロードパークの手法は重要であり、まずその検証を行う。次に、岩切が基礎を築いて 1960 年代から高まった宮崎の新婚旅行ブームと南国イメージが、復帰後の沖縄へ移ったプロセスを検討し、その意味を考察する。

3　結果

観光地・宮崎は、沖縄より歴史の厚みをもつ。バス会社・宮崎交通の創設者、岩切章太郎は戦前から観光開発に着手し、全国に影響を与えた。岩切は遊覧バスのため「建国の歴史」と「南国情緒」を考案し、戦後は南国が押し出された。青島のビロウに加え、堀切峠などにフェニックスを植樹し、観光コース「日南海岸ロードパーク」が確立した。名所の少なさこそが、南国的な観光開発を促した。

これを基礎に、60 年代には皇室関係の新婚旅行や川端康成原作の NHK ドラマを追い風に、宮崎は日本を代表する「新婚旅行のメッカ」となり、70 年代半ばまで不動の地位を築いた。

だが、南九州が日本列島の最南端として「南国」の力を持ちえた背景には、沖縄の米軍統治があった。72 年に沖縄が復帰し、75 年に海洋博が開かれると、航空・旅行会社の強力なキャンペーンもあって「日本最南端のトロピカル」の位置づけが沖縄に定着し、新婚旅行ブームも沖縄へ南下した。

岩切が日南海岸に導入したロードパークの手法は、海洋博で沖縄にも実現された。那覇と博覧会場を結んだ国道 58 号線沿いには、ハイビスカスやヤシなど亜熱帯植物が植え込まれ、西海岸の海とセットで、道路自体が〈海〉と〈亜熱帯〉のロードパーク、沖縄らしさを演出する装置として機能した。

4　結論

沖縄観光は長らく海外と国内の中間で両面を持ち合わせ、ハワイ・グアムとの相乗作用もあるが、国内旅行の面では、宮崎（南九州）で確立した新婚旅行と南国の密な結びつきは、復帰後に南下することで、沖縄観光・イメージの主流を戦跡・基地から「南国・トロピカル」へ変える重要な契機となった。また道路や風景自体を公園化するロードパークの手法は、動体視力で海と亜熱帯を実感できる美的な観賞装置へ西海岸の空間を組みかえた点で、間接的ながら岩切と日南海岸の系譜をうけている。

文献

岩切章太郎，1975，「沖縄と観光　宮崎観光の発展と私の経営姿勢」『月刊経営』11-12 月号，6-20.
岩切章太郎，2004，『心配するな工夫せよ』鉱脈社．白幡洋三郎，1996，『旅行のススメ』中公新書.